

## 家族として

私は高齢者の余生を豊かに過ごしていただくお世話を生業としている。その為か、高齢期になった時の家族との関わりの大切さをよく知る。面会には、殆どと言っていいほど娘様が来園され、献身的にお世話にやって来る。そんな光景を目の当たりにし、自身老後の理想的な未来絵図を自分勝手に描いていた。

平成十七年五月、待望の第一子を授かる。希望通りの女子であったことから「これで老後は安泰だな。」と妻にひと言。しかし「あなたの老後のために産んだものではありません。」と、きっぱり返答される。そこで我に返り、自分もそうだった様に、子供達が自ら選び、望む人生のお手伝いをする決意をした。

平成二十年九月、これまた待望の次女が誕生する。しかし、この時も老後のことを考えず、子供の幸せだけを考えるようにした。長女は、幼少期から控えめで慎重でマイペース。一つのことには集中して、こちらが感心するくらい真面目にコツコツこなすタイプ。次女は、正義感が強く、おせっかいでユーモアたっぷり。色んなことに興味があり何でもやりたいタイプ。同じ両親から生まれても、こうも違うものかと思うくらい真逆の性格の二人。私達の関わり方により影響を受け、娘達の現在がある。それと同じように、私と妻も子供の成長に関わることで様々な影響を受け変化している。

このような「心」の成長は、やはり家族がいるから得られるものであり、より深く絆を強くすることで家族として更に成長できれどと考える。最後に、娘達にも家族の大切さを知り、人の気持ちの分かる大人になれるよう、これからも支えていきたい。

## 子供とともに

四月、息子が小学校入学という成長の一つの節目を迎えました。少し大きめの真新しい制服に身を包み、かつて私自身が中学高校時代を過ごした同じ校舎に入っていく姿に、言葉では表しようのない感動を覚えました。

結婚して子供を授かるまで少し時間がかかりました。それだけに子供の誕生は喜びもひとしお、世の中にこんなにも愛おしい存在があるのだと教えられた瞬間でした。そしてそれから始まった母親一年生としての生活。初めての育児は想像を超え、それまでの人生でこんなにも大変だったことが他にあっただろうかと思うほどでした。しかしそれも子供の無邪気な笑顔と天使のような寝顔に癒されながら、ここまで乗り越えられた気がします。また子供がいることでできた経験や思いもありました。子供がいなければ行くこともなかったであろうイベントや公園、入ることもなかったであろうお店や教室、忙しく働いていた時には感じもしなかった季節感、子供のことが共通の話題でなければ出会うこともなかったであろう親御さんや先生方、そして何よりも気付かされた自分の両親への感謝の気持ち。「育児は育児」という言葉通り、子供の成長を通じて日々自分も成長させてもらっているという思いです。

息子の一年生としての生活もあと少しとなりました。入学してから今日まででも、親子で泣いたり笑ったりと色々なことがありました。でも小学校生活はまだまだ始まったばかりです。これからも子供とともに成長できる親でありたいと思っています。

## カラスの旅立ちに寄せて

## 娘の成長

五月のある日。けたたましいカラスの鳴き声で目が覚めた。そつとカーテンを開けると、ペランダの手すりの上に四羽のカラスがとまっていた。ある者は羽をばたつかせ、ある者は大きな声で何かを叫んでいる。彼らは一日中我が家の庭や塀の上に姿を見せ、何かをしているようだった。そして夕方。外が急に静かになったと思つたら、そこに彼らの姿はなく、その後彼らが私の前に現れることはなかった。その日が彼らの旅立ちの日だったのであろう。

彼らとの出会いは四月。隣家の庭のヤマモモの太木のでっぺんにカラスの巣を見つけた。青空をバックに、つがいで巣を守るカラスのシルエツトが映し出される。雨が降つても、風が吹いても、春の嵐が来て枝が左右に大きく揺れても、彼らは決して巣を離れなかった。やがて、巢の中から頭だけを出す二羽の子どもの姿が映し出された。二羽は日々成長し、よく動くようになった。その間、親鳥は巢にせつせと餌を運ぶ。そして迎えた旅立ちの日。いつもと違うカラスの声は、これから一人で餌を取り、生きていかなければならない我が子を励ます親の言葉であったのだろうか。人間もカラスも同じである。子育てをしているときは必死である。しかし、いつかは子どもは自立する、いや、自立させなければならぬ。そのとき、スムーズに自立できるように、普段から準備しておくのが親の役目だと思つている。時には優しく、時には厳しく。我が家の子どもたちはまだ小一と小二であるが、時間が過ぎるのは早い。来るべき旅立ちの日に向かって、カラスに負けないように親の役目を果たしていきたいと思つている。

二年前、我が家に二人目の娘が生まれました。長女は「お母さんは弟も妹も産んでくれない」といつも不満を口にしていたので、きつと喜んでくれるだろうと思つていました。しかし、六年間の心地よいひとりっ子生活から、突然のライバル出現で、生まれたばかりの赤ちゃんに容赦ない嫉妬の嵐となりました。周囲の人からは「そのくらい年が離れると、お姉ちゃんは妹のお世話をしてくれるでしょ」と言われ、実際そのような家庭が多いのですが、我が家には残念ながら当てはまらず、苦笑いをするしかありませんでした。

しかし、次女が少しづつ言葉を覚えはじめ、表情が豊かになるに伴い、長女も妹がかわいいと思えるようになってきたようです。近所で小さな女の子を見かけても「あの子より妹のほうがかわいい」とぼつちやりした男っぼい妹の肩を持ち、「ねーたん」と呼ばれると大喜びで頬を緩めるようになりました。

年の近い姉妹なら、もつと一緒に遊ぶこともできたのかなとか、幼い次女にあわせる生活で長女には申し訳ないなと思うこともあります。でも、小さな妹はしっかりと長女をお姉さんに成長させているようで、苦手だった我慢も覚え、弱いものを氣遣う優しさも芽生え始めています。今でも嫉妬心はちょこちょこ顔を出しますが、これから、もつと姉らしい姿が見られるようになりそうです。活発でしっかり者の長女と甘えん坊で小心者の次女が、どのような絆を繋いでいくってくれるのか、母として楽しみでなりません。

## 子の力、親の役目

父親の趣味で息子は否応なしに幼稚園年長時初スキーとなった。主人も最初は自分が教えると意気揚々としていたが、一時間後には親は怒り子は泣き楽しいスキーとは程遠くなっていた。その後急遽スクールに入れ人に託すことで息子も笑顔で初日を無事終えることができた。根気よく子に教える大変さを痛感し、子の甘えを避けるため時には人の力を借りることも大事だと学んだ。

今年五歳の娘の初スキーは、兄の時の教訓から最初からスクールへ入れたが、雪不足で人手も少なくインストラクターとの一対一となった。人見知りの娘にはそれもすでに試練で、一日コース限定のため長時間となり雨も降りだした。つい不安で近くで見ていると「甘えが出るので任せて頂いて見えない所でいて下さい。」と言われた。人に託すといいつつ中途半端だったことを反省し、昼休憩中ひたすらほめることに努めた。帰る頃にはリフトにも乗れコースを滑るようになり子の成長に感動できた。

普段仕事で泣いたり不安の中頑張る子を相手にするが、泣いてもやり遂げた時の自信の笑顔と次へのパワーはすばらしい。子供には限らない力が本来ありその発揮は関わる大人でも左右されるのではと思うことも多い。我が子では忘れてしまうが、挑戦し楽しく次へ進むよう支え、時には人の力も借り、失敗しても励ますこと、これが親の努めだと仕事や二人のスキーデビューを振り返り改めて感じた。毎日の中でつい注意が増え「見守りほめる」ことを忘れるが、子の成長を楽しめるのはあと少ししかできないと日々を反省した。学年があたりこれから思うようにいかないことも増えるだろうが、一呼吸置き支えられる親でありたいものだ。

## 限界は空高くに

高校生の時、千葉敦子さんというNY在住のジャーナリストの本をよく読んでいた。汽車でのんびり鳴門から徳島市内に通っていた自分にとって、海外での暮らしぶりや、乳がんを患っていないが前向きすぎるほどに仕事をしている彼女の文章は、ある意味強烈だった。英語で書かれていた「The sky is the limit」という短文は、若い女性に向けて書かれた文章であったと思う。「何になりたいの？ 宇宙飛行士、外科医、首相？ なんにでもなれるよ。限界は空高くにあるのだから。自分に限界を決めてはいけない。」という文章は、その頃、迷った時に、とりあえずやってみるという方向に進めてくれた気がする。そんな自分を思い出すと暑苦しくてたまらないのだけれど。しかし、四十を過ぎて、先の目標が曖昧になってきた自分を痛切に感じるからこそ、「こうなりたい」とイメージを持つ、夢を持つことができるなら、それに近づくことができるのだろうかと感じるようになった。夢や目標を持ってたら、そこに向かって行動すればよいのだから、そのような人は強い。そんな人は、とても幸せな人だと思う。

子供にも、いつか目標を持つてなりたいたい自分をイメージできるように世界に羽ばたいてほしいなあ、その手伝いをしなればと思いつつ、週末になると、とりあえず一週間乗り切ったとばかりに、ビール片手に息子とドラえもんを見ながら、ドラマラしてばかりの進歩なし。自戒もこめながらの文であるが、家族や友人に恵まれて、感謝の毎日である。

## 未来への希望を込めて

昨年の三月、長男が大学進学のために家を出ました。広くなった家の中で寂しさと共に、子育てには「巣立ち」という段階が訪れることを、しみじみと実感しました。

我が家の子供達は日々の生活の中で、色々な支えによって個人的に成長しています。先生や友人等との人間関係、学校や地域等の環境、書物や音楽等の文化活動、出合った全ての物から影響を受け育まれています。また、自分の長所と短所を理解し、批判を受け入れながらも、夢や目標を持ち続けています。そうした姿に寄り添うことが、母親としての毎日でもあります。

最近では、親だけが子育てに対して、全責任を引き受ける必要はないと感じています。むしろ親ほど無知で、自分の子供に対して視野が狭かったと反省しています。そして未来、子供の人生全部を抱え込むなど無理だということにも気付きました。

これから長い人生を歩む中で、いつも知性を働かせ、心にも耳を傾けて自分の価値観を持ち、それを守り通してほしいです。やがて学校を卒業し、社会に巣立つ自立の時がきます。どんなことでも立派にきちんとやりさえすれば大事な仕事になると知り、そのための努力も忘れないで下さい。

最後になりましたが、初等教育を文理小学校で勤勉に過ごせましたことを、大変有り難く感謝しています。このまま将来も、勉強を続けられる大人に成長してほしいと思っています。そしてさらに、受験の枠を超えて、「本当の勉強」にたどり着けるようにと、幸せと共に願うばかりです。

## 親子で宿泊訓練!!

夏休みの朝五時、朝から子ども部屋が騒がしい。見ると、普段は起きない息子が、身支度を終えてカバンを確認している。今日は、待ちに待った牟岐少年自然の家での宿泊訓練の日。朝ごはんも早々に済ませて、学校に一番乗りすると、家を飛び出していく息子を見ながら、日々こうであってほしいと思いつつ、こういう経験も良いことだと改めて感じた。

思えば、私も小学校や子ども会で行った合宿やキャンプは、楽しい思い出になっている。親元を離れた開放感と緊張感の中、子ども同士で生活すると、なぜかいつもは面倒で親任せにしていることも自ら出来るようになる。

忙しさを理由に、ついつい親の目の届く範囲でしか経験をさせてあげられていないことに気がつき、これからはこういう経験をもっと積ませてあげることが必要だと反省させられた。

親の心配をよそに、宿泊訓練から無事帰ってきた息子は、楽しそうに牟岐での出来事を話し、いつもは苦勞する日記を、あつという間に書きあげてしまった。そんな息子を見て、少したくましくなったかなと感じる私は親バカかもしれないが、息子にとつて貴重な経験になったことは間違いない。

これから息子もいよいよ高学年になり、徐々に親から自立していく時期に入る。毎日、あれこれ言うより、外に出して色々な経験をさせる方が、本人の自覚を促すことになる。頭では分かっているけれども出来ない自分に気がつき、実は親も子から自立していくための訓練であったことに改めて気づいたのであった。

## 二百年後の今に思うこと

## 山に学ぶ

先日、義父の一周忌の法事をお願いをしにお寺に行くと、「ちょうど二百回忌を迎えるご先祖がいらっしやるので、一緒にしましょう。」とのこと。二百年前に亡くなったそのご先祖は「吉信」という名前と戒名しかわかりません。二百年前といえば江戸時代です。ちょんまげに着物姿、ぞうりをはいていたであろう「吉信」さんは、どんな生活をしていたのでしょうか。そして、なぜ亡くなったのでしょうか。親戚とそんな話をしながら、私達は全く面識の無い「吉信」さんの法事を行いました。

法事の席では、私の横に十一才の息子が座っています。この子は、遙か二百年以上も前から、先祖が大切に命を繋いできてくれたおかげで生まれることが出来た一番新しい子孫です。私は息子を大切に育て、先祖が繋いできてくれた命を後世に繋いでいかなければならないのだと、責任を感じました。

それにしても、二百年たった今に「吉信」さんが生存していたことが過去帳に残されていて、その子孫が法事を行うなんて、日本が平和だから出来ることだと思います。今から二百年後には、私達が存在していた証は残っているのでしょうか。

「戦争を知らない子供達」という歌があります。昔も今も戦争を知らない、戦争のない平和な世界を生きる子供達であってほしいとの願いを込めて作られた歌だそうです。幼い頃、何の疑問も持たずに歌っていたように、今後何十年、何百年も当たり前前の歌であってほしいと思います。

今回の法事で、改めて命の大切さを考えさせられた一日でした。

毎年、夏になると山へ行く。北関東の実家の両親は昔から登山が趣味で、夏休みに子供達と帰省するたびに、喜んで山へと連れ出してくれる。

私も幼い頃から自然に親しんで育った。休日になると家族で近くの山や湖で過ごしたのを覚えている。今ではそこに三人の子供達に加わり、成長や体力に合わせ、三世代での山歩きを楽しんでいる。「若いのに体力がないなあ」と、父にたしなめられ、日頃の運動不足を痛感する。子供達も「休憩まだ？」と、ハアハア息を切らしながら、一歩一歩後に続く。末っ子の長男が小学校に上がった数年前からは、長い山道も歩けるようになり、標高が高い山にも少しづつ挑戦している。子供達はそこで色々な発見や経験をする。珍しい高山植物や雄大な北アルプスの山々を間近に見る。ある時は『熊に注意！』の看板にドキドキしたり、またある時は、体調不良の登山者が、ヘリコプターで救急搬送される場面に遭遇したりした。自然の美しさと同時に怖さも学んだ。

子育てをしていく中で、言葉だけではなかなか子供に伝えられないこともある。しかし、共に汗を流し、感動を共有することで、自然環境への意識も、努力の積み重ねの大切さも、すんなりと子供の心に入っていくような気がする。苦しくても途中であきらめず、自分の足だけでここまで来た、という登山体験が、いつか子供達の大きな自信と心の支えの一つになるといい。

山頂に立った時の達成感。そこへたどり着くまでの弛まぬ歩みの大切さ。日々の生活の中でも忘れずにいてほしい。

## 六年間を振り返って　親と子お互いの成長

## すばらしいちから

羽田空港から直行した入学式から、はや六年。長男の入学は、私たち夫婦のクリニック開業の年でもあります。当時、入学式の前日の夜、どうしても外せない予定が東京であり、入学式の当日、朝一便で息子たちと共に、空港から直行したのを昨日のこのように覚えていきます。五月の開院にむけて、一心不乱に開業準備をしていましたが、当時勤務先も退職していたため、毎朝徳島駅のバス乗り場まで、息子を送っていくのが日課でありました。長男には申し訳ないのですが、五月と六月の学校行事や自宅でどんな風に接していたかの記憶が全くありません。劇的な環境の変化に加えて、次男も二歳で、まだまだ手のかかる年で、今にして思えばよくそのようなスケジュールをこなしたなど、夫婦であきれています。

その後は、参観日や運動会などの学校行事には参加するように意識していましたが、一味会などの土曜日に行われるイベントには仕事の都合で、参加できないこともあり、寂しい思いをさせてしまったこともあります。我慢しつつも、両親の仕事に対して理解を示してくれた息子にありがとうといいたいです。

春から、いよいよ中学生。多感な時期を迎え、子育てにおいて最も大事な時期と考えています。人生の先輩として、しっかりと背中を見せてあげられるよう、親としてさらに成長し、積極的に子育てに関わっていきたいと考えています。最後になりましたが、ここまで育てて下さった、各学年の担任の先生方をはじめ、学校関係者の皆様、素晴らしい友人達、支えて下さった保護者の皆様、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

心に残る授業参観がある。椋鳩十さんの著書より、人間の持つ「すばらしい力」を語る章を読み、級友の「すばらしい力」を見てつけて伝え合うという内容だった。子供達が自分の机と黒板を行き来した数分後、黒板に貼られた大きな紙は、色とりどりの小さなメモで一杯だった。先生がメモを読み上げる度、歓声が上がった。友達から認められて改めて自分の良さに気付いた子もいただろう。照れながらも、自分への信頼感や自信を持った子もいただろう。

息子は、小学二年の夏から三年間、マサチューセッツ州ボストンの公立小学校で過ごした。言語も習慣も異なる中で大変苦労したが、言語を越えて、いかに相手の気持ちを理解し自分の気持ちを伝えるか試行錯誤した経験は、息子を逞しく成長させてくれた。そのような状況で寄り添ってくれた友とは、今もメールやスカイプで互いの悩みを語り合う。そして、その友の待つボストンでも一度学ぶという夢ができたそうだ。帰国後、息子は何度もなくじけそうになったが、その都度支えてくれたのは、友達存在だった。温かく話の輪に、遊びの輪に迎え入れてくれた。

参観の終盤、自分の書いた友達への称賛の言葉が読まれ、照れる友達を見る幸せそうな息子を見て、これまで、息子と私達家族を励まし支えてくれた友達に、心から感謝した。

椋鳩十さんは、人間はみな一人一人「すばらしい力」をもっており、勉強したり、本を読んだり、スポーツをしたり、感動するうち、自分がどんな力をもつか知ると語っている。息子が自分の力に気付き、その力を発揮できる様、心より願う。